

摂食障害の事例とアルコール使用障害の事例の ロールシャッハ・テストに示された心理的特性

山下 京子

(2001年10月9日 受理)

Psychological Traits shown in the Rorschach Test of the Cases of Eating Disorders and Alcohol-Use Disorders

Kyoko YAMASHITA

Abstract

The Rorschach Tests were performed for a case of anorexia nervosa (AN), two cases of bulimia nervosa (BN) and a case of alcohol-use disorders and results of the tests shown in this paper. These cases are all of young women. An analysis of the test results by means of the Comprehensive System clarified that the level of psychopathology of the case of AN is lighter than that of other three cases. It became also clear that the case of alcohol-use disorders displayed apparently different problems of personality structure from other three cases. While differences in the level of psychopathology inferred from the results of Rorschach tests were found between the cases of AN and BN, it was not certain whether or not such differences reflect those in symptoms of eating disorders.

1. はじめに

DSM-IVによると、摂食障害は、食行動の重篤な障害であり、神経性無食欲症（Anorexia Nervosa, 以下ANと略）および神経性大食症（Bulimia Nervosa, 以下BNと略）がある。ロールシャッハ・テストを用いた摂食障害の研究の中で、寫田・伊藤・馬場他（1985）は、テストの特徴と症状を対比させ、体験型と防衛活動の組み合わせを検討し、ANと神経症的防衛活動が優位であること、BNと原始的防衛活動が優位であることの関連を見出している。その後、河野・馬場（1993）は、摂食障害のロールシャッハ・テスト上の特質を分類し、症状との対応を試みているが、BNが必ずしも特定の体験型や特定の防衛活動に結びついているものではないこ

とを明らかにしている。本研究では、摂食障害の3事例（AN1事例、BN2事例）と、アルコール使用障害1事例に実施されたロールシャッハ・テストの結果を紹介し、そこに示された各事例の精神力動を描写すること、摂食障害の事例とアルコール使用障害の事例のテスト結果を比較し、症状選択との関連を検討することを目的とした。

2. 事例の概要

ケース①（AN）：女性，20歳代前半。診断名は，神経性食思不振症・うつ病。精神科初診時の主症状は，とじこもり，独語，感情易変，食欲不振で，入院時には，抑うつ，無気力が目立った。その後躁転するが，コントロール可能な状態で落ち着く。退院後，時々過食嘔吐があるが，基本的に調子は良い様子。外来通院中。

ケース②（BN）：女性，20歳代後半。診断名は，摂食障害（BN）。入院時の主症状は，過食嘔吐，抑うつ。治療途中で，本人の希望により転院。転院後の様子は不明。

ケース③（BN）：女性，20歳代後半。診断名は，摂食障害・境界例。初回入院時の主症状は，過食嘔吐，下剤乱用，体重への過度のこだわり。状態が安定せず，入退院を繰り返している。

ケース④：女性，20歳代前半。診断名は，人格障害。入院時の主症状は，アルコール依存。リストカットあり。退院後，しばらく通院するが，中断。接客関係の仕事に復帰している。

3. ロールシャッハ・テストの結果

各ケースとも，入院後，早期の段階で，医師の指示によりロールシャッハ・テストを実施している。ケース②を除いて，検査は包括システム（Exner, 1986）の手続きに従って行われ，整理・分析された。ケース②は，片口法（1960）の手続きにより実施されたテスト結果を，包括システムによりコーディングし，整理・分析した。ケース①の結果を表1に，結果を整理・分析した構造一覧表を表2に示した。また，ケース②の結果と構造一覧表を，表3，表4に，ケース③の結果と構造一覧表を，表5，表6に，ケース④の結果と構造一覧表を，表7，表8に示した。

4. ロールシャッハ・テストの解釈

1) ケース①のロールシャッハ・テストの解釈

表1，表2をもとに，Exner（2000）に従って解釈を行った。解釈手順は，体験型が外拡型な

表1 ケース①のロールシャッハ・テスト結果

図版	反応番号	反応	質問段階	スコアリング
I	1	このへんはカプトムシ。	クワガタムシ。ツノを出して。ツノを見て(クワガタムシ)。	Do4 FMpo A
	2	このへんに対しては、チヨウウチヨなんだけど。	チヨウウチヨ2。半分に分かれているからチヨウウチヨ。	Do2 F-2A ALOG
	3	全体的に見てチヨウウチヨみたい。	ひとつのチヨウウチヨ。	Wo Fo A P 1.0
	4	わからぬ。半分だけにしてみると犬みたい。赤がよくわからない。やっぱり犬かな。2つに分けると犬に見えるんです。この赤は、どこかを怪我した犬かなあ。	耳、尻尾、足が分けて。犬が2匹いて。血の色みたい。	D+1 FMp.CFo 2A,BI P 3.0 MOR
III	5	一輪車に乗った人。	頭、手、足。一輪車があった、こいでいる人。	D+9 Mao 2H,Sc P 3.0 GHR
	6	こはりボンみたい。	リボンに見えて。ここにあるのかわからないけど。	Do3 Fo Cg
	7	人が何か取ろうとしているように見える。	ここで、手で何かを持っている感じがする。	D+9 Mao 2H,Id P 3.0 GHR
IV	8	よくわからない。亀に見えて。	亀が顔を出している。頭で亀に見えた。	Ddo9 FMp-A
	9	よくわからない。人にも見えます。長靴をはいた人。	顔で、手で、ここが長靴。足に見えて、人間かなあと考えた。長靴をはいている。	D+7 Fo H,Cg P 4.0 GHR
V	10	鳥に見えます。羽はたいしている鳥に見えます。	この辺が顔で言うか、そんな感じ。翼。	Wo FMao A 1.0
VI	11	この辺まで。これが鼻で口みたい。両方。	天狗みたいに見える。	Do1 Fu 2(Hd) GHR
	12	この辺がよくわからないけど、この辺は案山子。あれと思う。	案山子。誰かが作った案山子。この辺が、こうなっているから(と身振りで示す)。	Do3 Mpo (H) GHR
VII	13	この辺は人の横顔。	2つ横顔があった。	Do1 Fu 2Hd PHR
	14	この辺は両方がウサギ。キスをするような感じが出る。岩に乗っているウサギに見えます。	耳が長いのでウサギ。口の形、一緒にキスするような感じ。岩、クレーっばいから何となく。	W+ Ma.CFo 2A,Is 3.0 FAB, COP PHR
VIII	15	この辺は木に登っているネコみたいに見えて。	緑色だから木と思つて。それに登ろうとしている。	D-1 FMa.CFo 2A,Bt P 3.0
	16	下の辺は、アゲハチヨウミみたいな感じがする。	いろんな色があつてアゲハに見えた。	Do2 CFo A
IX	17	これらの2つは海老に見えて。	この辺が、毛でいうかあれに見えた。	Do3 F-2A INC
	18	この辺は海草ですな。	エビだから海草がいいかな。	Dv11 Fu Bt ALOG
	19	これも一緒に海草に見えます。	これも海草。何て言うのかな、刺身とかについている、赤いやつ、あれに見えた。	Dv6 CF- Bt
X	20	青の方はクモに見えて。	クモ、足が8本あるみたいに見えて。	Do1 Fo 2A
	21	これがホタルに見えて。	ホタル、あかり。光っている。	D+15 FMp.CF- 2A,Id 4.0
22	22	これはむつかしい。やっぱり、こはミノムシ、木にぶら下がっているミノムシ。	ミノムシがぶら下がっている。緑色で、枝がある。服を着た、顔て言うかミノムシがぶら下がっていると思つた。	D+15 FMp.CF- 2A,Bt 4.0
	23	この辺はよくわからない。この緑の分もタツノオトシゴ。	タツノオトシゴ、くるつとなつていたから。	Do4 Fo 2A
24	この顔みたいなの。	目が2つあつて口に見えた。顔。	DdS099 F-Hd PHR	
25	この辺が牛に見える。濃い部分が牛に見える。	角。黒。白になっている。牛の顔。	DdS099 FC- Ad	
26	これは、枯葉に見える。	枯葉2。茶色で形も葉っぱ。	Dv13 FCu 2Bt MOR	

表2 ケース①のロールシャッハ・テスト構造一覧表

STRUCTURAL SUMMARY									
LOCATION		DETERMINANTS			CONTENTS		APPROACH		
FEATURES		BLENDS		SINGLE					
Zf = 10		FM.CF		M = 3	H = 3,0		I D.D.W		
ZSum = 29.0		M.C'F		FM = 3	(H) = 1,0		II D		
ZEst = 31.0		FM.CF		m = 0	Hd = 2,0		III D.D.D		
		FM.CF		FC = 1	(Hd) = 1,0		IV Dd.D		
W = 3		FM.CF		CF = 2	Hx = 0,1		V W		
D = 20				C = 0	A = 14,0		VI D.D.D		
W+D = 23				Cn = 0	(A) = 0,0		VII W		
Dd = 3				C' = 0	Ad = 1,0		VIII D.D		
S = 2				C'F = 0	(Ad) = 0,0		IX D.D.D		
				C' = 0	An = 0,0		X D.D.D.D.DdS.DdS.D		
				FT = 0	Art = 0,0				
				TF = 0	Ay = 0,0				
				T = 0	Bl = 0,1		SPECIAL SCORINGS		
+	= 8			FV = 0	Bt = 3,2			Lv1	Lv2
o	= 15			VF = 0	Cg = 1,1		DV	= 0×1	0×2
v/+	= 0			V = 0	Cl = 0,0		INC	= 1×2	0×4
v	= 3			FY = 0	Ex = 0,0		DR	= 0×3	0×6
				YF = 0	Fd = 0,0		FAB	= 1×4	0×7
				Y = 0	Fi = 0,0		ALOG	= 2×5	
				Fr = 0	Ge = 0,0		CON	= 0×7	
				rF = 0	Hh = 0,0		Raw Sum6	= 4	
				FD = 0	Ls = 0,1		Wgtd Sum6	= 16	
				F = 11	Na = 0,0		AB	= 0	CP = 0
				(2) = 14	Sc = 0,1		AG	= 0	MOR = 2
					Sx = 0,0		CFB	= 0	PER = 0
					Xy = 0,0		COP	= 1	PSV = 0
					Id = 0,2				
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS									
R = 26		L = 0.73			FC:CF+C = 1:6		COP = 1		AG = 0
EB = 4:6.5	EA = 10.5		EBPer = 1.6		Pure C = 0		GHR:PHR	= 5:3	
eb = 7:2	es = 9		D = 0		SumC':WSumC = 2:6.5		a:p	= 5:7	
	Adjes = 9		AdjD = 0		Afr = 0.86		Food	= 0	
					S = 2		SumT	= 0	
FM = 7	SumC' = 2		SumT = 0		Blends:R = 5:26		Human Cont	= 7	
m = 0	SumV = 0		SumY = 0		CP = 0		Pure H	= 3	
							PER	= 0	
							Isol Indx	= 0.23	
a:p = 5:6	Sum6 = 4	XA% = 0.69	Zf = 10				3r+(2)/R	= 0.54	
Ma:Mp = 3:1	Lv2 = 0	WDA% = 0.78	W:D:Dd = 3:20:3				Fr+rF	= 0	
2AB+Art+Ay = 0	WSum6 = 16	X-% = 0.31	W:M = 3:4				SumV	= 0	
M- = 0	Mnone = 0	S- = 2	Zd = -2.0				FD	= 0	
		P = 5	PSV = 0				An+Xy	= 0	
		X+% = 0.54	DQ+ = 8				MOR	= 2	
		Xu% = 0.15	DQv = 3				H:(H)+Hd+(Hd) = 3:4		
PTI = 1	DEPI = 2	CDI = 1	S-CON = 3		HVI = No		OBS = No		

表3 ケース②のロールシャッパ・テスト結果

図版	反応番号	反 応	質 問 段 階	スコアリング
I	v1	女性の骨盤。	アウシュピッツの死体の山の写真, 見たことがある。骨と皮の体で, こういふ形をしている。お肉がなくなる。と, こういふ風に骨盤が浮き出してくる。皮はなくて, 形もこんな感じで, 足を踏ん張っている。男性性器。人が絵を描いて, 足を描いて, 何か突起物が出ていて。	Wo Fo An 1.0 PER
	v2	卑猥な男性の性器。この辺はちょっと違う, このあたり。		Wo Ma.FD.Hd.Sx 1.0 PHR
II	3	目と口から血を流している人の顔。	目, 赤いから血を流している。口。輪郭がぼやけている。口をあけて血を流している。口をあけてペロと思ってもいいけど, 顔を見るので。	WS+mp.FC.Mp.FD.Hd, BI 4.5 MOR PHR
	4	ダンゴ。ゾウが2体, 玉に乗って, こう鼻をかけている。対になっている。ここが鼻のふくらみで。	鼻, 耳, ボール。サーカスで芸をしている。ゾウが芸をしている。顔, 胸, 手, 足。	D+6 FMao 2A, Sc 3.0
III	5	2人の女性が向かい合って, 胸でこうやっっているポーズを取って, 向かい合っている。		D+9 Mpo 2HP 4.0 GHR
	v6	蝶ネクタイを締めた怪獣。	目, 手, 足, 蝶ネクタイ。宇宙人, 怪物, 手が長くてカエルに近いけど, カエルじゃなくて, おなかがあった。翼があったり顔も角が生えていて, 動物でもないし, 鳥でもないし。羽の形, 黒い生き物, コウモリ。説明つくから。ここも説明つくから。男性性器, 足, 羽, 顔。	DdS+99 Fu (H), Cg 4.0 GHR
IV	v7	どうしても卑猥。男性性器を持ったコウモリ。	見た木。根っこの部分で, もみの木の形。昔絵本とかで10人, 人がおったら8人がアゲハチョウ (と言う)。黒いチョウ。確実。触覚, 羽, 足。	Wo FC'o A, Sx 2.0 INC
	8	木	ウ。ベターッと敷物みたいな, べしゃんこになっているところ。顔, 胴体。	Wo Fo Bt 2.0 PER
V	9	これはチョウウです。	とがつている。長細い。鼻, ひげ, 耳。	Wo FC'o A P 1.0
VI	10	何かよくお金持ちの玄関でトラとかの剥製のこういいうの, 敷物。	鼻, 口。西洋的な感じ。双子の男の子。ピノキオとか, 絵本で, 男の子二人。鼻の部分が強調されている。	Wo FT'o (Ad) P 2.5
VII	11	キツネの顔。	足。緑で, 木でいいうイメージ。ここは岩, こじつけたら。	Dd3 Fu Ad
	12	これは外国の童話, 挿絵。男の子と女の子が向かい合っている。	顔, 手。顔んでいる。苦労している人の目。男の子, 髪が短い。顔, 女性のやわらかさが無い。やつれ果てた男の顔。口とか鼻, 潤いがない。頬がこけて顔の肉が全然なくて, 険しいイメージがある。	D+1 Mpo 2Hq, Art P 3.0 GHR
VIII	13	トカゲ, 2匹のトカゲが木に登っているというか, へばりついている。	リンゴの木。リンゴが好き, 丸くて赤い。緑, 木というイメージ。人。リンゴの木, アダムとイブ (を連想)。	W+ FMa. CFu 2A, Bt 4.5
	v14	こうやっって頭を抱えている人(身振り)。	長くて, ふくよかな感じ。動物の鼻, 目。ネコでも犬でも羊でもない。ウサギに近いけど違う。長細い顔。目が小学校の時のヤギに似ている。目が黒でもなくて, ヤギの目の色が黒とか茶でなくウサギの色に近い感じでした。	Wo Mp- Hd 4.5 MOR PHR
IX	v15	正確なリンゴの木。アダムとイブ。		W+ FCu Bt, (H) 5.5 GHR
X	16	ひげを生やした王様の顔。		DdS+99 F- (Hd), Cg 4.0 PER PHR
	v17	ヤギ。		DdS099 FC- Ad PER

表4 ケース②のロールシャッハ・テスト構造一覧表

STRUCTURAL SUMMARY																	
LOCATION FEATURES			DETERMINANTS			CONTENTS		APPROACH									
			BLENDS		SINGLE												
Zf	=	15	M.FD		M	=	3	H	=	1, 0	I	W.W					
ZSum	=	46.5	m.FC.M.FD		FM	=	1	(H)	=	1, 1	II	WS.D					
ZEst	=	49.0	FM.CF		m	=	0	Hd	=	4, 0	III	D.DdS					
					FC	=	2	(Hd)	=	1, 0	IV	W.W					
W	=	10			CF	=	0	Hx	=	0, 0	V	W					
D	=	4			C	=	0	A	=	4, 0	VI	W.D					
W+D	=	14			Cn	=	0	(A)	=	0, 0	VII	D					
Dd	=	3			FC'	=	2	Ad	=	2, 0	VIII	W.W					
S	=	4			C'F	=	0	(Ad)	=	1, 0	IX	W					
					C'	=	0	An	=	1, 0	X	DdS.DdS					
					FT	=	1	Art	=	0, 1							
DQ					TF	=	0	Ay	=	0, 0							
					T	=	0	Bl	=	0, 1	SPECIAL SCORINGS						
+	=	8			FV	=	0	Bt	=	2, 1	Lv1	Lv2					
o	=	9			VF	=	0	Cg	=	0, 2	DV	=	0×1	0×2			
v/+	=	0			V	=	0	Cl	=	0, 0	INC	=	1×2	0×4			
v	=	0			FY	=	0	Ex	=	0, 0	DR	=	0×3	0×6			
					YF	=	0	Fd	=	0, 0	FAB	=	0×4	0×7			
					Y	=	0	Fi	=	0, 0	ALOG	=	0×5				
FORM QUALITY					Fr	=	0	Ge	=	0, 0	CON	=	0×7				
			FQx	MQual	W+D			Hh	=	0, 0	Raw Sum6	=	1				
+	=	0	0	0	0			Ls	=	0, 0	Wgtd Sum6	=	2				
o	=	8	2	8				Sc	=	0, 1							
u	=	4	0	3				Sx	=	0, 2	AB	=	0	CP	=	0	
-	=	5	3	3					Xy	=	0, 0	AG	=	0	MOR	=	2
none	=	0	0	0					Id	=	0, 0	CFB	=	0	PER	=	4
					(2)	=	14					COP	=	0	PSV	=	0
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS																	
R	=	17	L	=	0.42	FC:CF+C	=	3:1	COP	=	0	AG	=	0			
EB	=	5:2.5	EA	=	7.5	Pure C	=	0	GHR:PHR	=	4:4						
eb	=	3:3	es	=	6	SumC':WSumC	=	2:2.5	a:p	=	3:5						
			Adj es	=	6	Afr	=	0.42	Food	=	0						
			Adj D	=	0	S	=	4	SumT	=	1						
FM	=	2	SumC'	=	2	Blends:R	=	3:17	Human Cont	=	8						
m	=	1	SumV	=	0	CP	=	0	Pure H	=	1						
			SumT	=	1				PER	=	4						
			SumY	=	0				Isol Indx	=	0.18						
a:p	=	3:5	Sum6	=	1	XA%	=	0.71	Zf=15	3r+(2)/R	=	0.24					
Ma:Mp	=	1:4	Lv2	=	0	WDA%	=	0.79	W:D:Dd=10:4:3	Fr+rF	=	0					
2AB+Art+Ay	=	1	WSum6	=	2	X-%	=	0.29	W:M=10:5	SumV	=	0					
M-	=	3	Mnone	=	0	S-	=	3	Zd	=	-2.5	FD	=	2			
					P	=	4	PSV	=	0	An+Xy	=	1				
					X+%	=	0.47	DQ+	=	8	MOR	=	2				
					Xu%	=	0.24	DQv	=	0	H:(H)+Hd+(Hd)	=	1:7				
PTI	=	1	DEPI	=	4	CDI	=	3	S-CON	=	4	HVI	=	No	OBS	=	No

表5 ケース③のロールシャッパ・テスト結果

図版番号	反応	質問段階	スコアリング
I	1 何かのマーク。何かわからないけど服とかについているマーク。 2 コウモリ。 3 何にも見えない。人が向き合っている。人というか何か泥棒が、頭、よく巻いて顔を見せないようにする、あれを付けて向き合っている。 4 ブードル。 5 演歌歌手のステージ衣装。	よくTシャツにある。今時の、イメージで。 黒いから。 泥棒。そういうのを巻いている。綿々になって隙間から目と口が見える。頭、目、口、手。体の形、手を合わせている。 顔、お尻。2匹、ブードルは赤いリボンつけてる。 襟。広がりそう。人が真中に立っている。人が立って自分では広げられない、つづいている。着てはいない、置いてあるんか、人が見えない。衣装がある。 触覚、羽。 色が黒いから。羽が大きい。 ヒゲがある。顔。へしゃげている。 耳、尻尾。体。ウサギ。入り口、開く。門を開いたら、口を開いたり閉じたりする。皆がここから入っていく。ブタにも見えてきた。 こういうダイダイ系の感じの模様、すごい流行っている。 色彩的に見たら、洋服。 クマ、手を引っ張られている分けのわからない動物、クマが上を向いている。分けのわからない人が描いた絵。クマ、ピンクだし、何の動物かわからない。普通は、白とか茶なのに、誰が見てもクマとわからない。 色がこういう感じ。今、こういう感じの色の服を探していたから。オレンジとピンク、ブルー。 分けわからなかった。抽象画。まとまりがないようで、ある。誰が見ても、きれいじゃないけど、きれいと思う人がいるか。昔のちゃんとした絵を描いているピカソからしたら、かけ離れている絵。 角ある、黒いし、よく見る虫菌に似ている。気になつとる、ここ、攻撃しよる。もつと、虫菌にしろと言っている。他の菌。皆が、病院に行かしてくれんから(自分の菌のこと)。	Wv Fu Art Wo FC% AP 1.0 W+ Mp.FDo 2H.Cg 4.5 GHR D+9 FCo 2A.Cg 4.0 ALOG Wo mpu Cg 2.0 Wo Fu A 1.0 Wo FC% AP 1.0 Wo Fo A 2.5 MOR W+ mpu 2(A).Sc 2.5 Wv CFo Cg.Art W+ FMp.FCu 2A.Art, (A) P 4.5 INC Wv CF. Cg.Art DR Wv CFo Art DR W+ FC.Mpu 2(H).Id 5.5 AG, DR.FAB PHR
II	6 何かの虫。 7 これもコウモリみたい。 8 ネコかキツネみたい、車に轢かれて。 9 何か動物かウサギか向き合っている。そういう建て物みたいな門があつて、そこから入っていくみたい		
III	10 洋服の模様。今流行りの模様のように見える。		
IV	11 あとは、クマの、何か偉い人が描いた絵みたい。		
V	12 洋服の模様に見える。それしか見えない。		
VI	13 ピカソが描いた絵みたいな感じの。		
VII	14 虫菌を皆が取り囲んでいる。		

表6 ケース③のロールシャッハ・テスト構造一覽表

STRUCTURAL SUMMARY						
LOCATION FEATURES	DETERMINANTS			CONTENTS	APPROACH	
	BLENDS	SINGLE				
Zf = 10	M.FD	M = 0		H = 1, 0	I W.W	
ZSum = 28.5	FM.FC	FM = 0		(H) = 1, 0	II W	
ZEst = 31.0	FC'.M	m = 2		Hd = 0, 0	III D	
		FC = 1		(Hd) = 0, 0	IV W	
W = 13		CF = 3		Hx = 0, 0	V W.W	
D = 1		C = 0		A = 6, 0	VI W	
W+D = 14		Cn = 0		(A) = 1, 1	VII W	
Dd = 0		FC' = 2		Ad = 0, 0	VIII W.W	
S = 0		C'F = 0		(Ad) = 0, 0	IX W	
		C' = 0		An = 0, 0	X W.W	
DQ		FT = 0		Art = 2, 3		
		TF = 0		Ay = 0, 0		
+ = 5		T = 0		Bl = 0, 0	SPECIAL SCORINGS	
o = 5		FV = 0		Bt = 0, 0	Lv1 Lv2	
v/+ = 0		VF = 0		Cg = 3, 2	DV = 0×1	0×2
v = 4		V = 0		Cl = 0, 0	INC = 1×2	0×4
		FY = 0		Ex = 0, 0	DR = 3×3	0×6
		YF = 0		Fd = 0, 0	FAB = 1×4	0×7
		Y = 0		Fi = 0, 0	ALOG = 1×5	
FORM QUALITY		Fr = 0		Ge = 0, 0	CON = 0×7	
FQx MQual W+D		rF = 0		Hh = 0, 0	Raw Sum6 = 6	
+ = 0 0 0		FD = 0		Ls = 0, 0	Wgtd Sum6 = 20	
o = 7 1 7		F = 3		Sc = 0, 1		
u = 6 1 6		(2) = 5		Sx = 0, 0	AB = 0	CP = 0
- = 1 0 1				Xy = 0, 0	AG = 1	MOR = 1
none = 0 0 0				Id = 0, 1	CFB = 0	PER = 0
					COP = 0	PSV = 0
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS						
R = 14	L = 0.27			FC:CF+C = 2:3	COP = 0	AG = 1
EB = 2:4.0	EA = 6.0	EBPer = 2.0		Pure C = 0	GHR:PHR = 1:1	
eb = 3:3	es = 6	D = 0		SumC':WSumC = 3:4.0	a:p = 0:5	
	Adjes = 5	AdjD = 0		Afr = 0.56	Food = 0	
				S = 0	SumT = 0	
FM = 1	SumC' = 3	SumT = 0		Blends:R = 3:14	Human Cont = 2	
m = 2	SumV = 0	SumY = 0		CP = 0	Pure H = 1	
					PER = 0	
					Isol Indx = 0.00	
a:p = 0:5	Sum6 = 6	XA% = 0.93	Zf=10		3r+(2)/R = 0.36	
Ma:Mp = 0:2	Lv2 = 0	WDA% = 0.93	W:D:Dd = 13:1:0		Fr+rF = 0	
2AB+Art+Ay=5	WSum6 = 20	X-% = 0.07	W:M = 13:2		SumV = 0	
M- = 0	Mnone = 0	S- = 0	Zd = -2.5		FD = 1	
		P = 3	PSV = 0		An+Xy = 0	
		X+% = 0.50	DQ+ = 5		MOR = 1	
		Xu% = 0.43	DQv = 4		H:(H)+Hd+(Hd) = 1:1	
PTI = 1	DEPI = 4	CDI = 2	S-CON = 4	HVI = No	OBS = No	

表7 ケース④のロールシャッハ・テスト結果

図版	反応番号	反応	質問段階	スコアリング
I	1	ネコの真正面。	目がこつちに向いているから。目、鼻、口、耳。輪郭から何となく。	WSo FMpo Ad 3.5
	2	天使が向かい合っている。	手、顔、羽。羽っぽく見えなかったから。	W+ Mpu 2(H) 4.0 GHR
II	3	二人の人間が手を合わせている。	顔、目、口、手。胴体、足。	W+ Mpo 2H 4.5 GHR
	4	ブルドッグ。	目、醜いブルドッグの形。鼻と口が一緒になってわーってなっている。ぐしゃぐしゃ。	WSo F-Ad 4.5 MOR
III	5	人間の骨盤。	骨格が何となく。	Do1 Fo An
	6	下半身のない人間が二人。	今は見える、何で言ったんだらう。手をついている。	Do9 Mpo 2H P MOR PHR
IV	7	カマキリ。	目、口、足。	Ddo99 F-Ad
	8	リボンをつけたサンングラスのおっちゃん。	リボン、サンングラス。何となく人の顔。	DdS+99 FC,FC-Hd,Cg 4.0 PHR
V	9	年寄りの犬。	ポヨンと蹴が下におちちゃっている。(蹴は)色から。	WSo FV.mpu Ad 5.0 MOR
	10	悪魔が向かい合っている。	柱、向かい合っている。色的に、顔っぽかった。薄くなっている、顔っぽく見えた。悪魔、耳、胴体。	W+ Mp.FV.2(H),Sc 4.0 PHR
VI	11	ゴリラの足。	黒いんだけど、足の裏はちよっと白めだから。	Do6 FCo Ad
	12	チョウチヨ。	羽、触覚。	Wo Fo A P 1.0
VII	13	人間が横たわっている。	足が伸びていて頭をくっつけて寝てくっつけている。	W+ Mpo 2H 2.5 GHR
	14	シヨウの腕き。人間が浮かぶやつ。	魔術師、何となく。女の人が浮かばされている。でかいお姉さん。	W+ Mp- H 2.5 PHR
VIII	15	天狗が二つ。	お面。ハリマ天狗。ハリマさんがいるから怒られる、怒られそう。	Do1 Fo 2(Hd) DR PHR
	16	何だろう、人間の内臓。	全身的。ポヨンという感じ。臓器、レントゲンとって、3Dメガネで見たような。色もそう。	Wv VF,C/Fu Xy
IX	17	お人形が向かい合っています。	2頭身だから。頭、胴体。台。	W+ mpo 2(H),Id P 3.0 GHR
	18	人間の顔、3つずつ縦に。	髪、目、鼻、目、口。	Wo F- 2Hd P 2.5 PHR
X	19	女性が二人。	この赤い部分が何となく女性に見えた。赤いから。クマでもいいかな、クマが木に登っている。	Do1 CF- 2H PHR
	20	子宮。	保健体育のときに見せられたのと同じ形。全身的に。	Wo F- An 4.5 PER
X	21	チョウチヨ。	カラフルなチョウチヨ。全身的にひとつ。	Wo FC-A 4.5
	22	酔っ払いのおっちゃんの顔。	ボケーッとしている。目じりが、酒を飲みすぎて下がっている。二重あご。Tさんの顔にも似てる。目、鼻、口。	DSo1 Mpo 2Hd DR PHR
X	23	新種の虫。	すじがとおっているからゴキブリとかカブトムシとかの新種の虫。	Wo F- A 5.5
	24	子どもの落書き。	全部ワーツと絵の具を撒き散らして描いた感じ。	Wv CFu Art
	25	動物の、昆虫の集会。	クモ、足が何本もある。カブトムシ、角がある、いろんな虫。何となく虫。集まっている。	Wo Mtao 2A 5.5 FAB PHR

表8 ケース④のロールシャッハ・テスト構造一覧表

STRUCTURAL SUMMARY										
LOCATION FEATURES			DETERMINANTS				CONTENTS		APPROACH	
			BLENDS		SINGLE					
Zf = 16			FC'.FC		M = 7	H = 5, 0	I	WS.W		
ZSum = 61.0			FV.m		FM = 1	(H) = 3, 0	II	W.WS		
ZEst = 52.5			M.FY		m = 1	Hd = 3, 0	III	D.D.Dd.DdS		
			VF.C'F		FC = 1	(Hd) = 1, 0	IV	WS.W.D		
W = 17					CF = 2	Hx = 0, 0	V	W.W.W		
D = 6					CF = 2	A = 4, 0	VI	D.W		
W+D = 23					C = 0	(A) = 0, 0	VII	W.W		
Dd = 2					Cn = 0	Ad = 5, 0	VIII	D.W.W		
S = 5					FC' = 1	(Ad) = 0, 0	IX	DS.W		
					C'F = 0	An = 2, 0	X	W.W		
					C' = 0	Art = 1, 0				
DQ					FT = 0	Ay = 0, 0				
					TF = 0	Bl = 0, 0				
+					T = 0	Bt = 0, 0				
o = 16					FV = 0	Cg = 0, 1	DV	= 0×1	0×2	
v/+ = 0					VF = 0	Cl = 0, 0	INC	= 0×2	0×4	
v = 2					V = 0	Ex = 0, 0	DR	= 2×3	0×6	
					FY = 0	Fd = 0, 0	FAB	= 1×4	0×7	
					YF = 0	Fi = 0, 0	ALOG	= 0×5		
					Y = 0	Ge = 0, 0	CON	= 0×7		
					Fr = 0	Hh = 0, 0	Raw Sum6	=	3	
					rF = 0	Ls = 0, 0	Wgtd Sum6	=	10	
					FD = 0	Sc = 0, 1				
					F = 8	Sx = 0, 0	AB	= 0	CP	= 0
					(2) = 11	Xy = 1, 0	AG	= 0	MOR	= 3
						Id = 0, 1	CFB	= 0	PER	= 1
							COP	= 0	PSV	= 0
RATIOS, PERCENTAGES, AND DERIVATIONS										
R = 25			L = 0.47			FC:CF+C = 2:2	COP = 0	AG = 0		
EB = 8:3.0	EA = 11.0		EBPer = 2.7			Pure C = 0	GHR:PHR = 4:9			
eb = 3:6	es = 9		D = 0			SumC':WSumC = 3:3.0	a:p = 1:10			
	Adjes = 8		AdjD = +1			Afr = 0.39	Food = 0			
						S = 5	SumT = 0			
FM = 1	SumC' = 3		SumT = 0			Blends:R = 4:25	Human Cont = 12			
m = 2	SumV = 2		SumY = 1			CP = 0	Pure H = 5			
							PER = 1			
							Isol Indx = 0.00			
a:p = 1:10	Sum6 = 3	XA% = 0.60	Zf = 16	3r+(2)/R = 0.44						
Ma:Mp = 1:7	Lv2 = 0	WDA% = 0.65	W:D:Dd = 17:6:2	Fr+rF = 0						
2AB+Art+Ay = 1	WSum6 = 10	X-% = 0.40	W:M = 17:8	SumV = 2						
M- = 2	Mnone = 0	S- = 2	Zd = +8.5	FD = 0						
		P = 4	PSV = 0	An+Xy = 3						
		X+% = 0.44	DQ+ = 7	MOR = 3						
		Xu% = 0.16	DQv = 2	H:(H)+Hd+(Hd) = 5:7						
PTI = 3	DEPI = 6*	CDI = 3	S-CON = 4	HVI = YES	OBS = No					

ので、感情、自己知覚、対人知覚、統制、情報処理、媒介過程、思考の順になる。

(1) 感情：DEPI=2, CDI=1で陰性で、重大な感情の問題が存在する可能性は低く、被験者の「うつ病」の診断や、入院時の様子が反映されていない。EB=4:6.5, L=0.73で、体験型は外拡型であり、感情が思考において重要な役割を果たし、試行錯誤的な行動を起こしやすいタイプである。EBper=1.6で、多くの場合、思考に感情を交える傾向があるが、外拡型の使用において、幾分融通が利く。eb比率は7:2, SumC':WSumC=2:6.5で、特に問題はない。Afr=0.86で、成人外拡型の平均域が.60~.89なので、平均域にあり、ほとんどの成人外拡型と同様に、情緒刺激を取り入れ、関心を持っていると考えられる。2AB+Art+Ay=0で、被験者が過度に知性化を防衛手段として用いることはない。FC:CF+C=1:6で、一般的よりも感情放出の調節が緩やかであり、感情表現の激しさに時に注目されることもある。S=2で有意ではない。Blends:R=5:26で反応に占めるブレンドの比率は19%となり、外拡型でL<0.99の平均域が19%から33%なので、平均域に入っており、被験者の心理的な複雑さは、一般的であると仮定される。

(2) 自己知覚：OBS, HVIは陰性。Fr+rF=0で、被験者は特別な自己感覚を持っていない。3r+(2)/R=0.54で、平均を超えており、被験者は自己へ強い関心を抱き、そのために外界を無視してしまいがちになることが示されている。この指標が平均値を超えることは、多くの場合自己価値についての高い肯定的な評価を意味するが、時にはこの自己への強い関心が自己への不満感を示すこともある。FD, V反応はなく、自己への気づきが少ない可能性がある。An+Xy=0で、通常でない身体的なこだわりはない。MOR=2で、反応番号4(Ⅱ図版), 26(X図版)に出現しており、反応番号26は最終反応で、『枯葉』を見ている。被験者の自己概念に否定的な特徴が含まれ、自己についての悲観的な見解を促進させていると考えられる。H:(H)+Hd+(Hd)=3:4で、自己イメージや自己価値は、想像上の印象や、現実体験の歪曲に基づきやすい。全部で7個ある人間反応を内容に持つものは、反応番号5,7(Ⅲ図版), 9(Ⅳ), 11,12,13(Ⅵ), 24(X)であり、『一輪車に乗った人』(反応番号5), 『人が何か取ろうとしている』(7), 『長靴をはいた人』(9), 『天狗』(11), 『案山子』(12), 『人の横顔』(13), 『この顔みたいなの』(24)であった。DdS1個を除いて全てD, FQは、FQo4個, FQu2個, FQ-1個で、スペシャル・スコアはない。被験者の自己イメージは今一つはっきりしないところがあり、それは、反応段階で何度も『よくわからない』と述べることにも現れているように思われる。M, FM反応に特に問題になるようなものはない。

(3) 対人知覚：CDI=1, HVIは陰性で、社会的・対人的問題の素質はなく、他者との交流に過度に警戒するような性格特徴も見当たらない。a:p=5:6で、対人関係でより受動的な役割を取るという証拠はない。Food=0, T=0で、触覚的な交流が含まれるような親密な対人関係

において、被験者は期待される以上に慎重である。R=17~27の外拡型成人に期待されるHは3~6で、純粋Hの平均は2.5であるが、被験者の人間反応は7個で、そのうち純粋H反応3個であった。このことは、他者に対する強い関心があるが他者をよく理解していず、他者との関係に非現実的な期待を抱いたり、他者を遠ざけてしまうような社会的な間違いをしてしまうことを示唆している。GHR:PHR=5:3でGHRの方が多く、状況に応じた対人行動をとることのできる人である。COP=1, AG=0で対人行動に攻撃的な特徴が目立つことはない。PER=0で対人場面で防衛的になり権威主義的になることはない。孤立指標は0.23で、陰性である。

(4) 統制: AdjD=0, CDI=1で、被験者の統制力とストレス耐性はほとんどの人と同程度である。EA=10.5で平均域にあり、統制力とストレス耐性は信頼できる。Adj es=9で平均域。eb=7:2で、FM=7>5であり、焦点の定まらない、脈絡のない思考パターンを経験している。この思考パターンは、満足させられない欲求によって生じ、集中や注意を妨げると考えられる。

(5) 情報処理: Zf=10で情報処理努力は一般的である。W:D:Dd=3:20:3でDの占める割合が大きく、かなり経済的な情報処理努力をすると仮定される。W:M=3:4で達成目標を決めるのに、慎重な人である。Zd=-2.0で、平均域にあり、情報処理の効率は一般的である。DQ+=8で外拡型の平均域にあるが、DQv=3で期待されるよりも多く、情報処理の質は通常は適切であるが、時に洗練されず未熟な水準に落ちると仮定される。DQvは、反応番号18,19(Ⅸ図版), 26(X図版)で生じており、刺激が複雑になると、注意集中が妨げられ、情報処理の質の低下を招くのかもしれない。

(6) 認知的媒介過程: R=26, OBS陰性, L=0.73で特に問題はない。XA%=.69, WDA%=.78で、時々、媒介過程の機能不全が生じることが示されている。X-%=.31と平均よりかなり高く、現実吟味能力が低下している。FQ-は、反応番号2(I図版), 8(IV), 17,19(Ⅸ), 21, 22,24,25(X)で生じており、情報量が増えてくると媒介過程の機能不全が生じていると考えられる。P=5で、平均域にあり、手がかりが明白な時には非慣習的な反応は生じていない。X+%=.54, Xu%=.15で、X+%は平均より低く、非慣習的な行動は、媒介過程の機能不全と現実吟味能力の問題により生じていると仮定される。

(7) 思考: 体験型は外拡型でL<1.00であり、思考に感情を交えてしまいがちであるが、EBper=1.6<2.5で、時には感情を周辺のなものにとどめておくこともできる。a:p=5:6で、思考の非柔軟性を示す証拠はない。HVI陰性, OBS陰性, MOR=2で、概念形成に影響を与える心的特徴はない。ebの左辺は、FM=7, m=0で、内的な欲求状態により周辺の精神活動を経験している。この状況は慢性的なものであり、しばしば注意や集中を干渉する。Ma:Mp=3:1で、空想を過剰に使用するスタイルはない。また2AB+Art+Ay=0で、知性化を防衛として使用するタイプでもない。Sum6=4, WSum6=16で、重大な思考障害の存在を示している。

INCOM=1, FAB=1, ALOG=2 となっており、問題となるのは ALOG の存在である。ALOG は反応番号 2 (I 図版), 18 (IX) の 2 個で、何れも質問段階で『半分に分かれているからチョウチョ』(反応番号 2), 『エビだから海草がいいかな』(18) に対して付けられている。FAB は、反応番号 14 の 1 個のみであるが、22 の質問段階での『服を着た、顔て言うかミノムシがぶら下がっている』に対しても何らかの特殊スコアを付けるべきかもしれない。被験者の思考が未熟であること、時に誤った概念形成が生じることが示唆される。M 反応は、『一輪車に乗った人』(反応番号 5), 『人が何か取ろうとしている』(7), 『案山子。こうなっているから』(12), 『キスをするような感じが出て。岩に乗っているウサギに見えます』(14) であり、特に問題はない。

(8) 総合所見：被験者は、感情の問題よりも、認知的な問題を抱えていると考えられる。情報処理、媒介過程、思考のいずれにおいても、未熟な面が認められるが、単純で明快な場面では P 反応を出すことができる人であり、この点が被験者の良好な予後を示唆している。病理水準は、おそらくそれほど低くはないだろう。抑うつを伴う AN の事例であるが、抑うつに関して、テスト結果に明快に出ず、感情面での特徴としては、感情放出の調節が通常の人に比べて緩やかであること以外、特に目立つものはなかった。被験者の感情調節の問題は、被験者がその後、躁に転じたことにも現れているが、それほど重大な問題ではないように思われる。むしろ、認知面に見られる未熟さや、反応全般に感じられる未熟な印象の方が問題であると考えられる。被験者は、AN からは回復しているが、時々過食嘔吐がみられ、「食べること」へのこだわりは解消されていない。このこだわりに関して、テスト結果からは有益な情報を得ることができなかった。

2) ケース②のロールシャッハ・テストの解釈

表 3, 4 をもとに、Exner (2000) に従って、解釈を行った。解釈手順は、体験型が内向型なので、思考、情報処理、認知的媒介過程、統制、感情、自己知覚、対人知覚の順になる。

(1) 思考: EB=5:2.5, L=0.42 で、体験型は内向型であり、概念的思考重視の人で、熟慮した上で、意思決定をしたり行動するタイプである。内的な価値を外的フィードバックよりも重視し、感情によって影響されることを避けようとする。EBper=2.0<2.5 で、被験者は通常遅延を含んだ思考様式を用いるが、時には感情が意思決定に影響を及ぼすこともある。a:p=3:5 で、思考の非柔軟性を示す証拠はない。HVI 陰性、OBS 陰性、MOR=2 で概念の形成や使用に影響を与える心理的な構えや態度は見られない。eb の左辺は 3 で、FM=2, m=1 で、周流的な思考活動水準は平均的である。Ma:Mp=1:4 で、不快な状況を扱うおきまりの方策として空想へ逃避するスタイルが顕著に見られる。2AB+Art+Ay=1 で、防衛として知性化を過度に使用するスタイルは存在しない。Sum6=1, WSum6=2 で、思考のすべりや判断、概念形成に

問題はない。特殊スコアは、反応番号7(Ⅳ図版)の『男性性器を持ったコウモリ』のINC1個のみであるが、性的なことへの言及は、被験者の特徴であり、何らかの心理的こだわりを示している。Mは5個あり、そのうちFQ-は、反応番号2(Ⅰ図版)の『卑猥な男性の性器』, 3(Ⅱ)の『目と口から血を流している人の顔』, 14(Ⅷ)『こうやって頭を抱えている人』の3個であった。思考は特異であるか障害されている可能性があると考えられるが、WSum6には反映されていない。残りのMは、反応番号5(Ⅲ図版)『2人の女性が向かい合って、胸でこうやっているポーズを取って、向かい合っている』, 12(Ⅶ)『外国の童話、挿絵。男の子と女の子が向かい合っている』で、FQoである。

(2) 情報処理：Zf=15で平均より多く、通常よりも多くの情報処理努力をしている。W：D：Dd=10：4：3で、Wの占める割合が大きく、このこともより多くの情報処理努力をしていることを支持している。Wは、図版Ⅰ, Ⅱ, Ⅳ, Ⅴ, Ⅵ, Ⅷ, Ⅸで生じている。W：M=10：5で、動機づけが高く、現行の機能的能力に見合った以上のことを成し遂げようとしていると仮定される。Zd=-2.5で、情報処理効率は平均的である。内向型で、DQ+=8, DQv=0, DQv/+ =0なので、情報処理の質は適切である。DQ+は、図版Ⅱ, Ⅲ, Ⅶ, Ⅷ, Ⅸ, Xで生じている。

(3) 認知的媒介過程：XA%=.71, WDA%=.79で、媒介過程の機能不全の中くらいのレベルを示しており、明らかな特徴を歪曲したり、無視するなど、現実吟味能力の問題を反映している。X-%=.29, FQx-=5, FQxS-=3, FQ-を伴うDd=2で、媒介過程の歪曲を促進させる重大な問題がある。これには、感情の問題が関わっているかもしれない。FQ-反応は、反応番号2(Ⅰ図版), 3(Ⅱ), 14(Ⅷ), 16, 17(X)で出現し、そのうち反応番号2, 3, 14は、Mを決定因としており、ある種の奇妙な思考が現実を歪曲している可能性がある。P=4で、平均より低く、非慣習的な反応が生じやすい。Pは、Ⅲ, Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ図版で1個ずつ生じている。X+%=.47と平均より低く、媒介過程の機能不全と現実吟味能力の問題が、非慣習的な反応を生じやすくしていると仮定される。

(4) 統制：Adj D=0, CDI=3で、被験者の統制力とストレス耐性は一般的である。EA=7.5で平均域にある。EB=5：2.5, L=0.42でEAの値は信頼される。Adj es=6で平均域にあり、Adj Dの値は信頼できる。以上のことから、被験者の統制力とストレス耐性に関連した問題は見当たらない。

(5) 感情：DEPI=4, CDI=3で、陰性である。EB=5：2.5, L=0.42<1.00で、体験型は内向型であり、EBPer=2.0<2.5なので、通常は思考を優先させるが、時には感情によって影響を受けることもあると仮定される。eb=3：3で、普通ではない苦痛の体験は生じていない。SumC'：W SumC=2：2.5で感情を抑圧している証拠はない。Afr=0.42で、内向型成人の平均が.53~.78であることからしても、かなり低く、情緒刺激を避けようとする傾向が顕著である。

被験者は、感情を扱う場合、非常に居心地の悪い思いをするだろう。 $2AB+Art+Ay=1$ で、知性化を防衛手段として用いることはない。 $FC:CF+C=3:1$ で、ほとんどの人よりも感情の厳しい統制をしている。 $S=4$ で、図版Ⅱ,Ⅲ,Ⅹに生じている。被験者は、環境に対して、怒りに満ちた態度を持っている。このことは、個人の心理的機能に影響を及ぼす性格特性になっており、意思決定や対処行動に影響を及ぼすと仮定される。 $Blends:R=3:17$ で、Rの18%にあたり、内向型で $L<0.99$ の平均域が13~26%なので、心理的複雑さは平均的である。しかし、反応番号3は、4つの決定因を持っていることを考慮すると、通常は被験者の心理的複雑さは平均的なものであるが、時に非常に複雑なものになると考えられる。

(6) 自己知覚：OBS, HVIは陰性である。 $Fr+rF=0$ で、特別な自己感覚はない。 $3r+(2)/R=0.24$ で、成人の平均域.33~.45に比べ、かなり低く、被験者の自己評価は否定的な傾向がある。この特徴はしばしば抑うつの前駆となることがあるといわれ、被験者の入院時の主症状のひとつとして抑うつがあげられていることと一致している。 $FD=2$, $SumV=0$ で、幾分日常的に自己検閲行動が生じている。 $An+Xy=1$ で、通常でない身体的こだわりはない。 $MOR=2$ で、反応番号3(Ⅱ図版), 14(Ⅷ)に出現している。反応番号3は、反応段階で、『目と口から血を流している人の顔』と述べられ、質問段階で『目、赤いから血を流している。口。輪郭がぼやけている。口をあけて血を流している。口をあけてペロと思ってもいいけど、顔を見るので』と説明が加えられた。この反応は、ブレンド反応である。また、反応番号14は、反応段階で『こうやって頭を抱えている人』とし、質問段階で『顔、手。悩んでいる。苦勞している人の目。男の子、髪が短い。顔、女性のやわらかさがない。やつれ果てた男の顔。口とか鼻、潤いない。頬がこけて顔の肉が全然なくて、険しいイメージがある。』とかなり詳しく描写された。被験者の自己概念は否定的な特徴が顕著であり、思考における悲観性を促進させていると考えられる。おそらく被験者の自己イメージは、「苦悩する人」なのだろう。 $H:(H)+Hd+(Hd)=1:7$ であり、被験者の自己イメージや自己価値は現実経験よりも想像に基づいており、未熟で、かなり歪曲した自己理解をしていると考えられる。H反応は、反応番号2, 3, 5, 6, 12, 14, 15, 16に見られ、純粋H反応は反応番号5(Ⅲ図版)のみである。(H)が反応番号6, 15, Hdが反応番号2, 3, 12, 14, (Hd)が反応番号16である。 FQ_0 は反応番号5, 12, FQ_u は反応番号6, 15, FQ_- は反応番号2, 3, 14, 16で、被験者の自己イメージの否定的な特徴や歪曲を支持していると考えられる。

(7) 対人知覚：CDI, HVIは陰性で、社会的・対人的な問題の素質や性格特徴はない。 $a:p=3:5$ で、被験者は対人関係で受動的な役割を取りやすいところがある。 $Food=0$ で、通常でない依存傾向は存在しない。 $SumT=1$ で、被験者はほとんどの人と同様に親密さへの欲求を体験している。人間反応は8個あり、 $R=17\sim 27$ の内向型成人に期待される $H=5\sim 8$ に入るが、8

個のうち、純粋H反応は1個のみで、これは内向型成人の平均値が4.8であることと比較し、かなり低い値であることがわかる。被験者は、他者に対する関心は通常の人と同程度に持っているが、他者をほとんど理解していないと予想される。誤解する傾向が大きく、社会的な身振りをしばしば誤って解釈するなど、社会適応上の問題が生じると思われる。GHR:PHR=4:4で、被験者は場面に不適切な対人行動を取りがちであると仮定される。COP=0, AG=0で、おそらく日常の対人関係で肯定的な相互作用を期待しない人である。PER=4とかなり多く、対人関係場面で個人の統合性について不確かであり、対人関係を自己への挑戦として捉え、防衛的に権威主義になりがちである。孤立指標は0.18で陰性である。

(8) 総合所見：抑うつを伴うBNの事例であり、抑うつは、否定的な自己イメージや、環境に対する怒り、情緒刺激の回避に特徴が出ていると考えられる。また、防衛機制として、空想への逃避と権威主義が過度に利用されていることが示された。認知面では、媒介過程に問題が認められ、現実吟味能力が低下していると考えられる。このことは、思考にも影響を与えており、特異な思考が出現している。思考の障害は、WSum6には反映されなかったが、M-反応の歪曲には独特のものがあつて、思考障害の可能性は高いと思われる。病理水準はかなり重いと考えられ、特に不適切な対人知覚のために、社会的適応上、問題を生じやすいと予想される。本事例は、転院のために、退院後の情報が不明であるが、おそらく予後は難しいものがあるだろう。

3) ケース③のロールシャッハ・テストの解釈

表5, 6をもとに、Exner (2000) に従って解釈を行った。解釈手順は、体験型が外拡型なので、感情、自己知覚、対人知覚、統制、情報処理、認知的媒介過程、思考の順になる。

(1) 感情：DEPI=4, CDI=2で陰性。EB=2:4.0, L=0.27で、体験型は外拡型である。EBPer=2.0<2.5なので、通常、思考に感情を交えるが、時には感情を脇においてより明快な思考活動を行う柔軟性もある。eb=3:3で、SumC'=3となっており、情緒の放出を制止したり、衝動を抑圧する傾向のために、いらいらした感情や否定的な感情が存在することを示している。SumC':WSumC=3:4.0で、感情を抑圧している証拠はない。Afr=0.56で、外拡型成人の平均域に比べると低い値であり、被験者が情緒的刺激にあまり興味を持っていないか、関わろうとしていないことを示している。2AB+Art+Ay=5と高く、被験者は通常の人よりもしばしば知的なレベルで感情を取り扱おうとする傾向がある。R=14と少ないことを考慮すると、被験者の防衛手段としての知性化の活用は、かなり頻繁に生じると仮定できる。FC:CF+C=2:3で、一般成人と比較して、感情放出の調整に関して、幾分嚴重でない。Blends:R=3:14で、反応に占めるブレンドの比率は21%で、平均的であり、被験者の心理的複雑さは、外拡型の人々と同程度である。

(2) 自己知覚：OBS, HVI は陰性。Fr+rF=0 で、特別な自己感覚はない。 $3r+(2)/R=0.36$ で平均域に入り、通常の人々と同じ程度に自己への関心がある。FD=1, SumV=0 で、幾分日常的に自己検閲行動が生じていると考えられる。An+Xy=0 で、通常でない身体的なこだわりはない。MOR=1 で、反応番号 8(Ⅵ図版)の『ネコかキツネみたい、車に轢かれて。』であるが、最も MOR の生じやすい図版であり、特別な意味はないと考えても差し支えないだろう。被験者の自己イメージには否定的な特徴は含まれていないと仮定される。H : (H) + Hd + (Hd) = 1 : 1 で、人間反応数そのものが非常に少ないことが特徴である。これは、R=14 と総反応数の少ないことも関係している。純粋 H 反応は、反応番号 3(Ⅱ図版)の『何にも見えない。人が向き合っている。人ていうか何か泥棒が、頭、よく巻いて顔を見せないようにする、あれを付けて向き合っている。』のみで、(H) 反応は、反応番号 14(X 図版)の『虫菌菌を皆が取り囲んでいる。』のみであった。被験者の自己イメージははっきりとしていず、被験者自身も『何にも見えない』状態なのだろう。

(3) 対人知覚：CDI=2, HVI 陰性で、社会的・対人的問題の素質はなく、他者との交流に過度に警戒するような性格特徴はない。a : p=0 : 5 で、被験者は対人関係で、より受動的な役割を取りやすいと仮定される。Food=0 で、依存傾向はない。SumT=0 で、触覚的な交流が含まれるような親密な対人関係に対して慎重である。R=14~16 の外抜型成人に期待される H は 2~4 で、純粋 H の平均は 1.6 であり、被験者の H 反応は 2 個、そのうち純粋 H は 1 個で、被験者は他者に対して通常に関心を持っており、現実に基づいた方法で、他者を概念化していると想像される。GHR : PHR=1 : 1 である。COP=0, AG=1 で、被験者は、おそらく人々の間に肯定的な相互作用を期待しない。PER=0 で、対人場面で防衛的になり権威主義的になることはない。孤立指標は、0.00 で、問題ない。

(4) 統制：Adj D=0, CDI=2 で、被験者の統制力とストレス耐性はほとんどの人と同程度である。一方、EA=6.0 で、成人の平均域の 7~11 よりもやや低く、利用可能な資質が限定されていることが示されている。EB=2 : 4.0, L=0.27 で、EA の値は信頼できる。また、Adj es=5 で、成人の平均域 5~9 の下限であり、被験者の統制力とストレス耐性は、利用可能な資質が限定されているものの、ほとんどの人と同程度であると結論される。eb=3 : 3 で、FM=1 < 2 であり、欲求状態は通常の方法では体験されないか、ほとんどの人よりも欲求状態が早急に行為化される可能性がある。また、C'=3 > 2 で、被験者は外に出したい感情を過度に内在化する傾向を示しており、このことが身体的な症状として現れているのではないかと推定される。

(5) 情報処理：Zf=10 で、情報処理努力は一般的である。W : D : Dd=13 : 1 : 0 で、反応のほとんどが W であることが特徴的である。D は、反応番号 4(Ⅲ図版)のみである。W : M=13 : 2 で、被験者の体験型が外抜型であることを考慮しても、W の割合がかなり大きく、被験者

が現在の能力以上のことを成し遂げようとしていることがわかる。おそらく目標達成に失敗することが多いと予想され、多くのフラストレーション体験をしていると仮定される。 $Zd = -2.5$ で、平均域にあり、情報処理の効率は一般的である。外拡型のDQ+の平均域は、5～8であり、被験者のDQ+=5は、その下限に当たるが、DQv=4と多く、情報処理の質は、通常は適切であるが、時には洗練されず、未熟な水準に落ちると仮定される。DQ+は、反応番号3(Ⅱ図版)、4(Ⅲ)、9(Ⅶ)、11(Ⅷ)、14(X)でみられ、DQvは、反応番号1(Ⅰ図版)、10(Ⅷ)、12(Ⅸ)、13(X)でみられた。反応番号1がDQvであることと、残りの3個のDQvがⅧ図版以降で生じていること、さらに、DQvが各図版の第一反応として生じていることが特徴的である。おそらく被験者は、初めての場面や、情緒的な刺激に直面する時、情報処理の質が未熟な水準に落ち込みやすいと考えられる。

(6) 認知的媒介過程： $XA\% = .93$ 、 $WDA\% = .93$ と平均より高く、媒介が場面に適切であるように保証するための特別な努力をしていると仮定される。 $X-\% = .07$ 、 $FQ- = 1$ で、媒介過程の機能不全の起こる確率は、通常の人よりもずっと少ないと結論される。 $P = 3$ で、 $R < 17$ の場合の期待されるPは4～6であることから、単純で明快な場面においてさえ非慣習的な行動が生じやすいと考えられるが、この結論は、被験者のXA%、WDA%の高さとは矛盾している。 $X+\% = .50$ 、 $Xu\% = .43$ により、この矛盾は解消されるだろう。すなわち、被験者の媒介過程における決定の多くが非慣習的であり、普通ではないけれども場面に適切な反応であるために、現実吟味能力の問題を反映しないと考えられる。被験者は、社会的な要求や期待にあまり影響されず、個性を強く打ち出すタイプであると思われる。

(7) 思考：体験型は外拡型で、 $L = 0.27 < 1.0$ であり、 $EBper = 2.0$ で、通常は思考に感情を交えるが、時には感情を周辺にとどめておくこともできる。 $a:p = 0:5$ で、被験者の思考面の構えや価値観は固定的で、かなり非柔軟的である。おそらく自分の態度や意見を変えたり、異なる視点を取ることは、被験者にとって非常に難しいことだろう。HVI陰性、OBS陰性、 $MOR = 1$ なので、概念形成に影響を与える心理的特徴はない。ebの左辺は3で、平均域にあるが、 $FM = 1 < 2$ であり、被験者の内的な欲求状態は通常の方法では体験されず、早急に行動するか、防衛的に概念化してしまうことを意味している。その一方で、 $m = 2$ であり、状況的ストレスによって、周辺の思考の活動水準が一時的に増大している。 $Ma:Mp = 0:2$ で、被験者は、不快な状況を扱う日常的な方策として、空想への逃避を過剰に使用するスタイルを持っている。また、 $2AB+Art+Ay = 5$ で、感情を知性化しやすい傾向がある。特殊スコアは、 $Sum6 = 6$ 、 $WSum6 = 20$ と大きく、重大な思考障害の存在を示している。被験者の現実吟味能力は、限界の水準で、思考は一貫せず、誤った判断により特徴付けられると仮定される。特殊スコアの中味は、 $INC = 1$ 、 $DR = 3$ 、 $FAB = 1$ 、 $ALOG = 1$ であり、DRの多さとALOGの存在が問題となる。DRは、反

応番号12(Ⅸ図版), 13, 14(X) で生じており, 注意集中の持続が困難なことの現れと解釈できるかもしれない。ALOG は反応番号4(Ⅲ図版)の質問段階で『ブードルは赤いりボンつけてる』に対して付けられている。水準としてはレベル1であるが, 被験者の思考の特異性が現れていると考えられる。

(8) 総合所見:境界例と診断されたBNの事例である。R=14と少なく, EA=6.0と利用できる資質が限定されていることが特徴である。防衛機制として, 感情を知的に処理しようとする知性化と, 現実を否認するための空想への逃避を過度に利用している。認知面では, 情報処理の段階で, 動機づけが能力以上のものを要求しており, 情報処理の質が時折未熟な水準に落ち込むことが特徴である。また, 媒介過程における個性化が顕著であり, Pが少ないにもかかわらず, XA%, WDA%は良好であった。思考障害は, 意図的な思考への集中は干渉されやすいことと, 思考の非柔軟性で示されており, 特に思考の非柔軟性は, 治療上の困難性を高めると予想される。病理水準としては, 境界例水準であろう。被験者は入退院を繰り返しているが, 利用できる資質の限定と少ないPが鍵となっているように思われる。

4) ケース④のロールシャッハ・テストの解釈

表7, 8をもとに, Exner(2000)に従って解釈を行った。DEPI=6>5が陽性であり, 解釈手順は, 感情, 統制, 自己知覚, 対人知覚, 情報処理, 媒介過程, 思考の順になる。

(1) 感情: DEPI=6, CDI=3<4で, 重大な感情の問題が存在すると仮定される。EB=8:3.0, L=0.47で, 体験型は内向型である。EBper=2.7>2.5であり, 感情は意思決定行動において非常に限定された役割しか果たさない, 極端な内向型である。eb=3:6で, 被験者は苦しんでいると仮定される。ebの右辺は, C'=3, V=2, Y=1で構成されており, C'とVの値が目される。C'は感情放出の制止と, Vは厳しい自己検閲行動が生じていることと関連している。SumC': WSumC=3:3.0で, 特に問題はない。Afr=0.39で, 内向型成人の平均域の.53~.78に比較して, かなり低く, 情緒刺激を避けようとする傾向が顕著であることが示されている。2AB+Art+Ay=1で, 被験者が過度に知性化を防衛手段として用いることはない。FC:CF+C=2:2で, 感情放出の調節が, 一般成人に比べやや嚴重ではない。S=5であり, 図版I, II, III, IV, IXで生じており, 環境に対して, 非常に怒りに満ちた態度を持っていることを示しており, 心理的機能に影響を与える性格特性になっていると考えられる。Blends: R=4:25で, ブレンド比率は16%であり, 被験者の心理的複雑さは平均的である。ブレンドのうち, FC'.FCが1個あり, 被験者は感情によってしばしば混乱すると仮定される。被験者は, 他者よりも激しい感情を体験し, 情緒的な状況に対して閉ざすことが難しいことがある。また, VF'.CFが1個あり, 苦痛に満ちた情緒の存在を示している。この種の苛立ち, 被験者の心理的機能の全般に破壊的な

打撃を与えると仮定される。

(2) 統制：Adj D=+1, CDI=3であり、被験者はより頑強なストレス耐性を持っており、統制で問題を体験する可能性は非常に少ないと仮定される。EA=11.0, Adj es=8で平均域にある。一方、eb=3:6で、被験者は苦悩を体験していると仮定される。FM=1<2で、欲求状態は通常の方法では体験されないか、早急に行動することを示している。また、C'=3>2で、外に出したい感情を過度に内在化する傾向がある。さらに、SumV=2>0で、被験者は、ほとんどの人よりも、自己イメージの否定的な特徴に焦点を当てた自己検閲行動をしていると考えられる。被験者の統制力とストレス耐性は、D=0, Adj D=+1で、D<Adj Dに該当することを考慮すると、より明確になる。つまり、被験者は、穏やかな状況関連ストレスを受けていて、現在、被験者の通常の統制力やストレス耐性よりも、低くなっていると考えられる。

(3) 自己知覚：HVI陽性、OBS陰性である。HVI陽性の人、傷つきやすさにとらわれており、自分が傷つかないように保護することに一生懸命で、困難なことや失敗の原因を外的な力に帰属させることで、自己を防衛する。被験者の心理的構造の中核には、このような警戒心過剰スタイルが存在すると仮定される。Fr+rF=0で、特別な自己感覚はない。3r+(2)/R=0.44で平均域にあり、通常の人と同程度に自己への関心がある。FD=0, SumV=2で、被験者は自己の否定的な特徴にとらわれており、このことが苦痛な感情を生じさせていると考えられる。An+Xy=3で、何らかの通常でない身体的なこだわりが存在する。MOR=3で、反応番号4(Ⅱ図版)、6(Ⅲ)、9(Ⅳ)に出現しており、『醜いブルドッグの形』(反応番号4)、『下半身のない人間が二人』(6)、『年寄りの犬』(9)であった。ここでは、身体的な外見的特徴が取り上げられており、被験者が身体的なこだわりを持っていることと関係しているかもしれない。被験者の自己イメージは、否定的な特徴が顕著であり、思考はより悲観的な自己概念を含んでいると考えられる。H:(H)+Hd+(Hd)=5:7で、自己イメージや自己価値は想像上の印象や現実体験の歪曲に基づきやすい。H反応は、反応番号2(図版Ⅰ)、3(Ⅱ)、6、8(Ⅲ)、10(Ⅳ)、13、14(Ⅴ)、15(Ⅵ)、17、18(Ⅶ)、19(Ⅷ)、22(Ⅸ)である。『リボンをつけたサングラスのおっちゃん』(8)、『酔っ払いのおっちゃんの顔』(22)のように、男性像はユーモラスに描写されるのに対して、『ショーの続き。女の人が浮かばされている』(14)、『女性が二人。赤いから。クマでもいいかな』(19)に示されるように、女性像は他者に操作される存在であり、全く別のものにも置きかえることのできる曖昧性が特徴である。このユーモラスな男性像は、被験者が酔っている時の自己イメージであるかもしれない。

(4) 対人知覚：CDI陰性。HVI陽性であり、被験者は、他者との関係に非常に用心深く、保守的であると考えられる。a:p=1:10で、被験者は対人関係で受動的な役割を取りやすいと仮定される。Food=0で、通常でない依存傾向はない。T=0で、触覚的な交流が含まれるような

親密な対人関係に対して慎重である。R=17~27の内向型成人に期待されるHは5~8で、純粋Hの平均は4.8であるが、被験者のH反応は12個、純粋Hは5個で、他者に対する強い関心があるが、他者をよく理解していないことが示されている。GHR:PHR=4:9で、PHRの方がかなり多く、状況に不適切な対人関係を取りやすく、他者から好ましくないとみなされがちである。COP=0, AG=0で、被験者は、日常の対人関係で肯定的な相互作用を期待しない人である。PER=1で問題ない。孤立指標も0.00で陰性である。

(5) 情報処理：被験者は、警戒心過剰スタイルがあり、環境に対して防衛的であり、不信感を抱いている人で、情報処理において一般的ではない人格スタイル傾向がある。Zf=16と平均よりかなり高く、通常よりも多くの情報処理努力をしている。このことは、W:D:Dd=17:6:2で、Wの占める割合が大きいことにも示されている。W:M=17:8で、現在の能力以上のことを達成しようとしていると考えられる。Zd=+8.5>+3.0とかなり高く、刺激摂取過剰スタイルの存在を示している。被験者は、不注意を避けようとして、必要以上に刺激走査活動を行うので、情報処理の効率性に欠けることがある。DQ+=7, DQv=2で、内向型成人のDQ+=7~10, DQv=0~1なので、情報処理の質が普段は適切であるが、時に洗練されず、未熟な水準に落ちると仮定される。DQvは、反応番号16(VI図版), 24(X)で生じている。

(6) 認知的媒介過程：XA%=.60<.70, WDA%=.65<.75で、媒介過程に重大な障害が存在することを示している。媒介過程の障害は、現実吟味能力に顕著な影響を与えている。このことは、X-%=.40, FQx-=10, S-=2, FQ-を伴うDd=2からも裏付けられ、被験者の現実吟味能力はかなり障害を受けていると考えられる。FQ-反応は、反応番号4(II図版), 7, 8(III), 10(IV), 14(V), 18(VII), 19, 20, 21(VIII), 23(IX)に出現している。中でも、VIII図版の反応は全てマイナス反応であり、強い情緒刺激に直面すると、現実吟味能力が低下すると推察される。P=4で、平均より低く、非慣習的な反応が生じやすい。Pは、III, V図版で各1個、VII図版で2個生じており、VIII図版では、質問段階で『クマでもいいかな』(反応番号19)とP反応が出ており、被験者の感情の問題が現実吟味能力に影響を及ぼしていることがわかる。X+%=.44と平均よりも低く、媒介過程の機能不全と現実吟味能力の問題が、非慣習的な反応を生じやすくしていると仮定される。

(7) 思考：EB=8:3.0, L=0.47で、体験型は極端な内向型である。被験者の意思決定行動に、感情はきわめて限られた役割しか果たさない。a:p=1:10で、思考の構えや個人的価値観は固定化され、かなり柔軟性に乏しいものと仮定される。HVI陽性で、被験者の概念思考は明確でなく、柔軟性に欠け、非論理的な思考パターンを生じやすくなる。また、MOR=3であり、通常ではない悲観主義に特徴付けられている。ebの左辺は3で、FM=1, m=2であり、被験者は、欲求によって自然に生じる周辺的な精神活動を最小にしたり、避けたりする人である

が、現在は、状況関連ストレスによって、周辺的な精神活動が増大していると考えられ、その結果、周辺的な思考活動水準は平均的なものにおさまっている。Ma : Mp = 1 : 7 で、現実を否認するために、空想を過剰に利用している。2AB + Art + Ay = 1 で、防衛として知性化を過度に使用する証拠はない。Sum6 = 3, WSum6 = 10 で、被験者の思考活動は、通常よりもしばしば思考のすべりや誤った判断が生じることにより特徴付けられ、明確でなく、洗練されていないと仮定される。特殊スコアは、DR = 2, FAB = 1 で、VI, IX, X 図版で生じている。M- = 2 で思考が特異で、阻害されている可能性が高いことを示しているが、M- の見られる反応番号10 (IV 図版), 14 (V) の反応は、『悪魔が向かい合っている』(反応番号10), 『ショーの続き。人間が浮かぶやつ』(14) で、それほどひどい歪曲ではない。

(8) 総合所見：人格障害と診断されたアルコール使用障害の事例である。DEPI, HVI が陽性であり、被験者の人格構造上に問題があると考えられる。極端な内向型であるが、感情の問題が大きく、感情によって混乱し、苦痛を体験している。環境に対する激しい怒りがあり、他者に対する警戒心は過剰で、不適切な対人関係を持ちやすく、社会適応上、問題が生じやすいと予想される。また、自己イメージは、否定的であり、自分の否定的特徴ばかりを見て、苦悩を増大させていると考えられる。認知的側面においても、警戒心過剰スタイルの影響を強く受け、情報処理の効率は低下している。被験者は極端な内向型であるが、認知的側面の障害も重大であり、現実吟味能力も低く、思考のすべりや誤った判断によって特徴付けられている。防衛機制として、現実を否認するために、過度に空想への逃避を利用している。また、思考の非柔軟性が認められ、被験者の価値観や態度を変えることが非常に難しいことと、失敗体験や自分の満足できない結果に対して、原因を外的なものに帰属させようとするスタイルは、治療上の困難さを増大させると予想される。現実的に、治療が中断していることも、このことを裏付けている。病理水準としては、かなり重いと思われる。

5. 事例の比較・検討

ケース①, ②, ③, ④のロールシャッハ・テストの結果を比較・検討する。反応数は、ケース① (以下①と略) が26, ケース② (以下②と略) が17, ケース③ (以下③と略) が14, ケース④ (以下④と略) が25であり、③の反応数がかなり少なく、数量的に取り扱うことのできる限界の数値である。特殊指標は、④のみ、DEPI, HVI が陽性であり、他のケースとは人格構造上の問題が異なっていると考えられる。HVI は警戒心過剰スタイルを意味し、環境を否定的に捉え、信頼することができず、環境に対して過度に防衛的であることを示している。体験型は、外拗型が①と③, 内向型が②と④であった。④は極端な内向型である。BN を症状とする②と③

は、それぞれ、内向型と外拡型に分かれており、症状選択と体験型の関連は、明らかでない。ハイラムダスタイルのケースはなかった。EAは、10.5 (①), 7.5 (②), 6.0 (③), 11.0 (④) で、利用できる資質が限定されているのは③のみであった。③の資質の限定は、XA%やWDA%の高さにもかかわらず、予後不良と関わっていると考えられる。また、ebの結果から、④のみ苦痛の体験が生じていることが示された。この苦痛は、主に自己の否定的特徴ばかりを見てしまう厳しい自己検閲によって生じている。

認知的側面での結果を比較すると、①, ②, ④はXA%, WDA%が低く、現実吟味能力の低下が示されている。一方、Pは、①を除いて平均以下であり、予後を予測するのに、Pは有効であるように思われる。WSum 6は、②を除いて高く、思考の障害を示している。思考の非柔軟性は③, ④に見られ、悲観的な思考は④のみに見られている。④は、アルコール使用障害の事例であるが、同じ、アディクションでも、摂食行動に向かうか飲酒行動に向かうかは、この悲観主義と関連しているのではないだろうか。悲観主義は、また厳しい自己検閲行動とも関係している。

感情的側面では、②と④が環境に対する激しい怒りを持っていることが特徴的である。情緒刺激の取り入れの指標であるAfrの値は、.86 (①), .42 (②), .56 (③), .39 (④) で、①のみ平均的に情緒刺激を取り入れており、③は情緒刺激にあまり関心を持たず、関わろうとしないタイプであり、②と④は情緒刺激を回避することが示された。感情放出の調節は、②を除いて、通常よりも緩やかであり、特に①は時に感情表現の激しさで注目されることもある。

防衛機制は、①では明確に現れず、②では空想への逃避と権威主義、③では空想への逃避と知性化、④では空想への逃避が認められた。過剰な空想への逃避は、現実を否認し、責任や意思決定を回避することになるため、社会的適応上、困難に出会いやすいと考えられる。また、防衛機制は、病理水準を反映していると考えられ、①の病理水準は他のケースと比較すると、かなり軽いのではないと思われる。①はANの事例であるが、病理水準とAN、BNとの関連は、本研究が事例研究であることもあって、明らかではない。

自己知覚では、自己への関心を示す $3r+(2)/R$ の値が、①で.54と高い以外は、平均的(③, ④)か低く(②)になっていた。厳しい自己検閲行動は、④のみに生じており、また、通常ではない身体的なこだわりも、④のみに認められた。④は防衛機制として空想の乱用が特徴的であったが、この防衛が破綻した時に、厳しい自己検閲から逃れるための手段として、飲酒を利用しているのではないかと想像される。自己概念は、①, ②, ④で否定的な特徴が含まれており、現実の体験よりも想像に基づいていた。反応に示された自己イメージは、①と③は不明瞭であり、被験者自身も『よくわからない』(①), 『何にも見えない』(③)のであろう。②は『目と口から血を流している人間』『悩んでいる』と表現されたように、苦悩している自己イメージを抱いていると考えられる。④は、『酔っ払いのおっちゃん』であると同時に輪郭のはっきりしない女

性イメージとして表現されている。

対人知覚では、④が、傷つけられることを恐れ、他者に対する警戒心が強く、対人関係で防衛的になることが示されている。良質な人間反応と悪質な人間反応の比を示す GHR : PHR は、5 : 3 (①), 4 : 4 (②), 1 : 1 (③), 4 : 9 (④) であり、①のみ、適切な対人関係を持つことができると仮定され、他の3ケースは不適切な対人関係を持ちやすいと考えられる。また、①を除いて、対人関係でより受動的な役割を取りやすく、空想への逃避を防衛手段として用いて、現実的な責任や意思決定を回避するために、他者に依存し、他者の操作に対して脆弱であることも特徴である。

6. おわりに

摂食障害の3事例とアルコール使用障害の1事例を比較した結果、飲酒行動への耽溺は、ロールシャッハ・テストにおいては、悲観主義と厳しい自己検閲行動として示されるのではないかと想像される。若い女性のアルコール使用障害の事例を集め、この点について明らかにすることが、今後の研究課題のひとつである。病理水準としては、ANの1事例が、他の事例よりも軽いことが示されたが、病理水準の差がANとBNの違いを反映しているかどうかは、本研究結果のみでは明らかではない。ANの事例は、退院後、過食嘔吐が始まっており、この食へのこだわりをロールシャッハ・テスト上で明らかにすることはできなかった。摂食障害の治療経過は長いことが多く、縦断的に追跡していく必要があるだろう。この点も、今後の研究課題である。

7. 文 献

- 1) Exner, Jr., J. E. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 1: Basic Foundations, Rorschach Workshops. (高橋雅春他訳 1991 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上) 金剛出版)
- 2) Exner, Jr., J. E. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System. Vol. 1: Basic Foundations, Rorschach Workshops. (秋谷たつ子他訳 1991 現代ロールシャッハ・テスト体系 (下) 金剛出版)
- 3) Exner, Jr., J. E. 2000 A Primer for Rorschach Interpretation. Rorschach Workshops.
- 4) 片口安史 1960 心理診断法詳説 牧書店
- 5) 河野通子・馬場禮子 1993 摂食障害と防衛活動—ロールシャッハ・テストを中心に— ロールシャッハ研究35 93-108.
- 6) 畷田圭子・伊藤幸江・馬場禮子他 1985 摂食障害の精神力動—ロールシャッハ・テストを中心に— 心理臨床学研究15, 1-8.